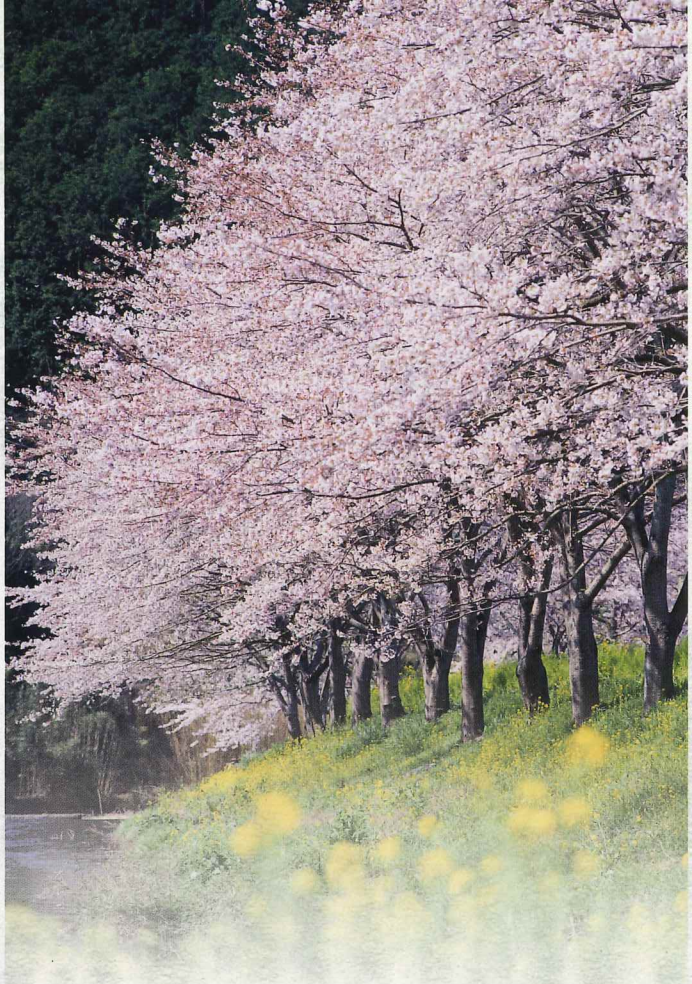
令和五年四月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

書の光

4
2023



Vol.656

宮城野書道会

漢詩を味わう

第165回

田園楽（七首其六）　王維

桃紅復含宿雨　桃は紅にして　復(ま)た宿雨を含み
柳緑更帯春煙　柳は緑にして　更に春煙を帯ぶ
花落家僮未掃　花落ちて　家僮未だ掃わず
鶯啼山客猶眠　鶯啼いて　山客猶(な)お眠る

桃は紅に花咲き、昨夜の雨を含んで潤う。
柳は緑に芽吹き、さらに春霞を帯びる。
花びらが散り敷いても、召し使いはまだ掃除しない。
鶯が啼いても、山荘の主は春の眠りをむさぼっている。

《宿　雨》よいごしの雨。
《春　煙》春のもや或いは春霞。
《家　僮》少年の家僕、召し使い。

王維（六九九―七六一）は二十一歳で進士に合格し、順調に官僚の道を歩み宮廷詩人として名を成しました。一方、寡欲で立身出世を望まず、四十三歳で都の東南藍田山のふもと網川(もうせん)に別荘を構えて「半官半隠居」の生活を楽しみました。今風にいうとセミリタイヤです。山や湖といった自然豊かな地に「網川荘」と名付けた別荘では、裴迪(はいてき)などの親友と閑適な時を過ごしています。

この詩は、桃花、柳、春霞、鶯という春の自然美と、それと融合して生活する歓びを六言絶句という珍しい詩形で詠っています。中国で、桃は陶淵明の『桃花源の記』で桃源郷という語句が使われて以来、日本の桜にも相当する花の代表に挙げられています。また李白は『山中問答』で「桃花流水窅然(ようぜん)として去る。別に天地の人間に非らざる有り。」と詠んで、文学に現れる桃花は仙境の象徴とされています。柳は春になると他の草木に先駆けて緑に芽吹き春を代表する木で、ここでは桃の紅と柳の緑を対句として春爛漫の景色を描いています。

後半の「山客」は王維自身を客に擬していますが、王維も家僕も自然のなかに溶け込んで楽しげに暮らしている様子を詠います。後半の二句も花と鶯、山客と家僮と前半同様に対句で仕立ているため意味が明瞭で、一幅の画のようにその風景が眼前に浮かんできます。王維にとって網川荘での生活は、まさに桃源郷のような理想郷でした。

王維は仏教信者として有名で、字の摩詰は維摩詰(ゆいまきつ)という居士の名前もしくは維摩詰経というお経からとっています。彼にとって仏教は快楽な生活を精神的側面から支えるもので、自然に囲まれた生活は仏教の浄土思想と結びついているかのようです。

参考文献：中国詩人選集「王維」（岩波書店）・漢詩の辞典（大修館書店）

黄河遠く上る　白雲の間　一片の孤城　万仞の山　羌笛何ぞ須いん　楊柳を怨むを　春光度らず　玉門関

《大意》黄河をはるばる遡り、白雲の中へと分け入っていくと、険しい山々に囲まれて、ぽつんと小さな城がある。その城から羌笛の音が響いてくる。羌の人たちよ、そうやって悲しい音色で我々の郷愁を誘い、戦意をくじこうなんて、そんなことする必要は無いのだ。どうせ春の光はこの玉門関の外までは届かないのだから。（王之渙・涼州詞）

還郷を夢みん

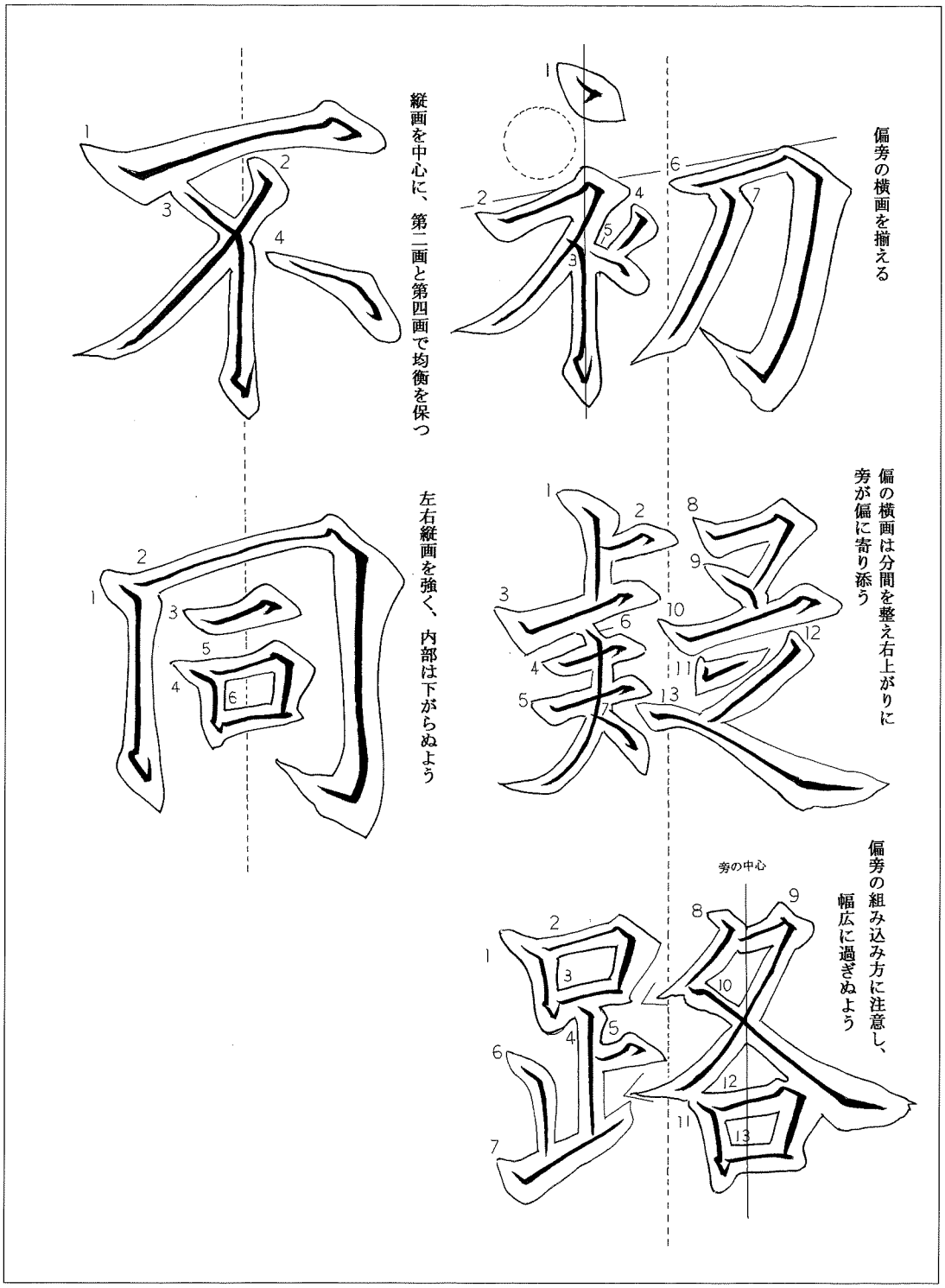
《大意》故郷にもどることを夢見ている（趙渢詩句）

佐藤象雲書

読み　初めは路の同じからざるを疑う（最初はもしや違う方向へ行く川筋かもしれないと疑った）

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

王維詩
「藍田山の石門精舎」（前半）

落日山水好
落日　山水好し

漾舟信歸風
舟を漾わせて　歸風に信す

玩奇不覺遠
奇を玩んで遠きを覺えず

因以緣源窮
因りて以て源を緣ねて窮む

遙愛雲木秀
遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同
初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉
安んぞ知らん　清流轉じて

偶與前山通
偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策
舟を捨てて輕策を理む

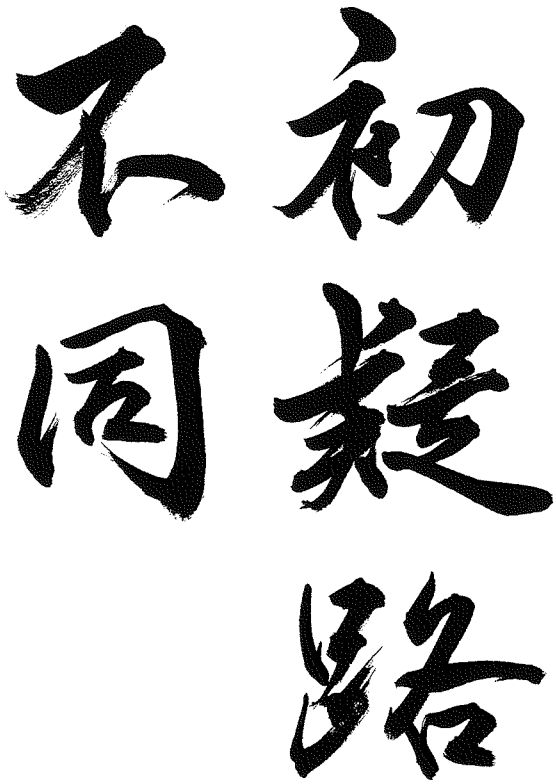
果然愜所適
果然として適する所に愜う

老僧四五人
老僧　四五人

逍遙蔭松柏
逍遙して松柏に蔭う

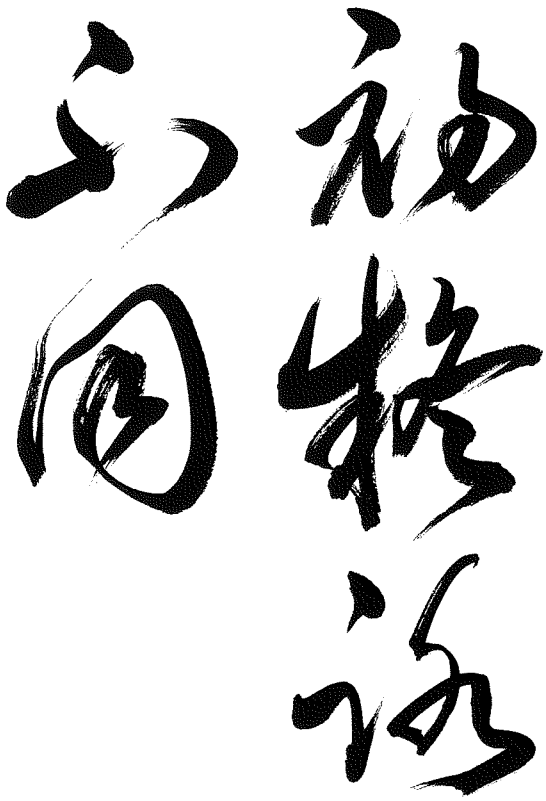
（後半に続く）

行書



※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草書



◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷書

次号課題

安（いず）くんぞ知らん 清流転じ

ペン字部課題　（4月28日〆切）

細字部課題　（4月28日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　チュウミンセキビ
ランジュンショウショウ

略解　昼は昼寝、夜はぐっすりやすむ
青竹で編んだ象牙の装飾の寝台に眠る

支部	順位	氏名

来しかたや（あしび）

馬酔木咲く野の日のひかり

水原　秋桜子

和泉　溪石　先生書

蓮性自潔

蓮の性自ら潔くして……

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書　(71)

象雲臨

『蓮性自潔』

唐時代初期までの楷書碑は、字の結体を充実させて、筆使いは豊満であることが尊ばれました。四角いマス目いっぱいに配字したものが好まれ、さらに端正なだけではなく、隷書の筆意を混ぜることで古風と荘厳さを加えることが要求されたと言われます。清代の楊守敬は「褚公は始め帖法を以て碑に入れ、点逗相生じ、波掠相配し、一筆の転ぜざるはなく、一字の重複するはなし。（平碑記）」と言い、褚遂良の書は碑に適する字ではなかったが、帖の筆法を碑に取り入れたことが最大の特徴であることを指摘しています。

おなじ初唐の虞世南と欧陽詢の楷書は法度的なのに対して、正しい格調のなかに叙情と華麗さを漂わせていると言えます。

今月は「蓮性自潔」の四文字です。文字の大小と線の強弱などに留意して臨書してください。

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(52)

則ち胡・越の風に殊にする者なり。

象雲臨

『則胡越殊風者』

この一節は「若し豪釐察せざれば」に続く部分で、「北方の胡と南方の越がまるで風俗が異なるように、（もしわずかの筆先でも十分でなければ）本来の書とはかなりかけ離れてしまうだろう。」と孫過庭は述べています。またこのあとに「草は流にして暢なるを貴ぶ」と言っていて、まさに今月の六文字は流暢な草書です。

最初の三字「則胡越」はゆったりと書かれていますが、筆先が繊細に円転して流麗です。特に「越」の横画から縦に続く部分と偏から旁に続く部分は、途切れずに小さな弧を描いています。続く三字「殊風者」は行末のため細線で小さめですが、前記の文のように、わずかな筆先が十分に働いていて線が途切れていません。

注意が必要なところは筆先がどちらを向いているかです。筆先を自在に円転させるためには、右や手前に傾き易い筆管を左へ、さらに向こう側に傾くくらいに運ぶことで筆先が活躍します。